

特定非営利活動法人

おokayま人權研究センター・ニュース

発行 センター事務局 2012. 10. 10 第21号

岡映研、水島会員「身分的周縁について」報告

10月8日(月) 1時30分から、岡山民主会館で、岡映研が開かれました。今回のテーマは、身分的周縁論でした。水島さんは、吉田、塚田、脇田編『身分的周縁』、1994年 吉川弘文館のシリーズ(全6巻)、塚田孝「身分と身分的周縁について」(『部落問題研究』193号2010年)などを取り上げられました。

「身分的周縁」とは、近世の「雑種賤民」のことであり、70年代半ばからの研究進展を受けてのものであること、「周縁」という命名の仕方の中に、対象のみならず、「方法」意識も込められているといった報告でした。

70年代半ば頃は、「国民的融合論」などの提唱もあり、部落解放運動も大きな転機を迎えた時期であり、「身分的周縁」研究の進展が、「国民的融合論」を結果した面とその提唱が研究の進展を促した面もあるように思われます。

討論としては、「身分」とは何か、マルクスの「身分」概念、ウェーバー的「身分」概念をどう捉えたらよいか、などが話しあわれました。

また、かつての近世封建制論と、この身分周縁論とがどう接続するのかといった問題も出されました。よく話題になる「士農工商、エタ非人」といった近世封建制の総体的な概括にどのような修正変更を迫るものであったかなどといった問題も出されました。

なおこれに先立って、9月2日に菅木一

成さんが、「榊利夫の部落論と国民的融合論」について報告されました。それによれば、榊は、1970年代の黒田俊雄らの中世非人研究の成果などを受け入れつつ、部落差別の政治起源説を否定すると同時に、分裂支配という「政治的機能」を結果したことをも認めるものであった、ということでした。

明治以降については、「封建的残滓」としての差別意識の存続であり、それは、体制変革に先立って民主主義の純化の中で解消されるはずのものだという展望を提起した画期的なものであったことを報告されました。

教育研究会

10月6日(日)「中国高等学校歴史教科書の検討」ということで、南京在住の会員さんからお借りした中国高等学校歴史教科書の中国近現代100年の記述を小出隆司氏が翻訳した画期的な報告でした。

アヘン戦争から抗日戦争、世界の多極化まで、かなり詳しい記述がされていること。中国の近代の外交は屈辱の歴史であったこと。それを中国共産党が世界の大国に押し上げたということ。必ずしも反日教育を重視していないということが具体的にみられました。

愛国無罪の背景に、中華思想が厳然として貫かれており、それが事実上の反日教育になっているのではという意見が交わされました。教科書採択に向けての運動の提起もされました。参加者は5人でした。